



「世界の今を伝える、そして知ること」

金沢大学附属高等学校 1年 岡田 菜子

「発展途上国に多い栄養不良状態の子供の二の腕の太さ、どのくらいか知ってるか。」

これは、私が中学3年生の時の道徳の授業で先生が私たち生徒に問いかけた質問である。私は、いったいどのくらいなのだろうと思いましたが、普段の生活の中では考えることのない質問に答えが浮かばなかった。

「12.5センチ以下だ。つまり、ペットボトルのふたの周りの長さと同じくらいだ。」

と先生は答えた。私は、全く想像できず、ただ驚いた。

さらに先生は、ある1枚の写真を見せた。それは、餓死寸前の少女とハゲワシの写真だった。ワシが餓死寸前の少女を狙っているのである。少女の母親が食糧を手に入れいてこようとし、子供を地面に置いた短い時間に起こったのである。私は、とても衝撃を受けた。この写真がニューヨーク・タイムズに掲載されると、写真を撮った報道写真家・カーターがそのとき少女を助けず写真を撮ることを優先したことに対する批判も多く寄せられた。そして、その写真家の自殺により、「人命か報道か」という命題が世界で取り上げられるようになった。私は、報道を優先したことは間違っていなかったと思う。仮に、人命を優先していたとする。ハゲワシを追い払い、少女に食糧を与え、その後も少女が食糧を受け取り、生活ができるようにすれば、彼女の命は助かっただろう。しかし、彼女のように飢餓に苦しんでいる子供は彼女1人ではない。彼女1人を助けたところでこの問題の根本的な解決にはなっていなかったと思う。この写真はこの世界の見過してはならない現状であり、同じ世界にこんな地域があって苦しんでいる人々がいるという象徴になるのではないかと思う。そして、この写真を見た人々が少しでも支援活動を試みよう、戦争なんてすべきでないと思う気持ちを生むきっかけになれば、助かる命は増えるのではないかと思う。きっと、それがこの写真が持つ役割ではないだろうか。

では、実際に私たちがどのような支援ができるのだろうか。飢餓に苦しんでいる人々のいる地域へ行って、食糧を配ればいいのか。現在、世界には9億2500万人もの人々が栄養不良状態なのである。そして、発展途上国において栄養不良により5歳になる前に命を落とす子供たちが1年間で500万人もいるのである。ましてや、紛争の最中に行くのには危険が伴う。となると、やはり私たちにできることは募金などに限られてくるのだろうか。そんなことはないと思う。自分自身によくあてはまることの1つに、食べ物の好き嫌いを減らすことがある。他にも、電気や水などの資源を大切に使うこと。また、私がこのような問題について考えるたびに思い出す「世界がもし100人の村だったら」という本には、自分たちの生活にありがたみを感じ、この世界を、この世界に生きる人々を愛することが必要なのだと書いてありました。私たちにできることは身の回りにあふれているのです。

近年では、減少していた飢餓人口が再び少しずつ増加傾向にあります。この事実を知っている人々はどのくらいいるのだろうか。まずは、知ることから始めるべきだろう。平和な世界を望む人間として。